

アルザス史3 三十年戦争 初めてのフランス

志村 良知

しかし幸福は長くは続かない。1618年、ハプスブルクによる新教弾圧から宗教戦争として端を発した戦争は、現在ドイツと呼ばれる地域の支配権をめぐる争いとなり、ハプスブルクを潰せ、のフランスが旧教国にもかかわらず新教国側につくなどして「三十年戦争」に拡大する。ハプスブルクの奥座敷アルザスは、まず戦う乞食と言われた戦争ごろつき＝エルンスト・フォン・マンズフェルトの侵略と9か月間に及ぶ無差別殺戮と略奪に遭う。

新教軍の中核グスタフ2世アドルフ率いるスウェーデン軍は神聖ローマ帝国領南部・東部への侵攻で有名であるが、アルザスにも2年間居座り破壊と略奪の限りを尽くした。このことはスウェーデンの学校でも正直に教えている、とはスウェーデン人から聞いた。

さらに、両軍の正規軍崩れの山賊や脱走兵や傭兵崩れも戦場の東端のアルザスに蝟集し、荒廃に輪をかけた。この時破壊されたままこの世から永遠に消え去った村も少なくないという。コルマールも徹底的に破壊された。現在「お伽噺の様な」と観光客を集める旧市街の家並みは、この荒廃からの復興になるもので、たかだか400年足らずの歴史しかない。

近年「夜の画家」「光の画家」として人気のあるジョルジュ・ド・ラ・トゥールはこの混乱の時代のロートリンゲンに生まれ、主にそこで活動したと言われている。しかし、彼の名は一旦世界史から消え去り、20世紀になってから「再発掘」された。この消え去った理由はヨーロッパ全体を覆う、ペストと地球規模の低温による飢饉、それに三十年戦争などの大災厄で「危機の世紀」といわれた17世紀の混乱が大きな理由の一つであろう。

1648年、関係国全てが疲弊しきって戦争どころではなくなり、ウェストファリア講和会議が開かれる。最も荒廃と疲弊が酷かった神聖ローマ帝国・ハプスブルク家は、さらにスイス（独立）、アルザス、ネーデルランド（スペイン・ハプスブルクから独立）のライン川南北交易ルートの支配権を一挙に失う。アルザスは歴史上初めて西側＝フランス王国に属することになった。これは、何もかも壊滅的になった北アルザスの諸侯がフランスに保護を求め、それに応じたフランスがすでに出兵していたこと、2年以上アルザスに居座ったスウェーデンがフランスにアルザスの軍事的支配権を移譲したこと、宗教も利害もキメラのように入り組んだ状態のアルザス諸侯が団結も代表権も曖昧なまま講和会議に臨んだこと、などから結

果として一番強くて声が大きかったフランスの支配下になったということだった。

アルザス諸侯の期待は帝国自由都市の継続であった。しかし太陽王ルイ14世はそんなに甘くない。即位後30年の1673年、35歳になったルイ14世は自ら1万を超える大軍を率い、フランス国王として初めてアルザスに巡幸し、1226年以来の勅許帝国自由都市コルマルを狙い撃ちで武力威嚇し自由都市のシンボルの城壁を破壊させた。「アルザスよ、フランス王の臣民たれ」という断固とした意思表示だった。この環状の城壁跡の一部はシティ・センターを囲む道路となって残っており、地図上で往時を偲ぶことができる。

こんな筈ではなかったアルザス諸自由都市は元の君主国、神聖ローマ帝国に救いを求め、帝国もこれに応じてアルザス争奪戦争となる。宗教戦争の性格も帯びた戦いは1681年最大の帝国自由都市ストラスブールのフランス国王への完全屈服で終わる。1681年9月、アルザスから神聖ローマ帝国時代の全ては一掃され、地勢上もほぼ現在の形になり、ルイ14世統治する中央集権国家フランス王国のアルザス州となった。しかし、アルザスの治安維持には3万の兵力を常駐させる必要があった。

現在でもアルザス人の中にはこの時のことを「ルイが来て……」という言い方をする人たちがいる。これには、ルイ14世によるフランス化はあんまりハッピーな出来事では無かった、というニュアンスを感じた。

1770年、ブルボン家はアルザスの旧領主ハスブルク家から花嫁を迎える。14歳の王女マリア・アントーニアは、国境のライン川の中州に建てられた花嫁引き渡し所でウィーン製はパンツから何もかもをパリ製に着替えさせられてストラスブールに迎え入れられ、パリ近郊ベルサイユ宮殿で王太子と挙式。後のフランス王妃マリー・アントワネットである。

フランス革命を経てナポレオンの時代となる。同じ辺境出身のナポレオンへの共感からか、ナポレオン軍には多くのアルザス人が参謀や高級将校として名を残している。パリの凱旋門に刻まれている戦功者600名中40名がアルザス人だという。中でもナポレオン戦争最末期、ワーテルローの敗戦後、侵入軍からアルザスを守り、故郷コルマル中央のラップ広場に名と銅像を残すジャン・ラップ将軍（バルトルディ作のこの像は第二次大戦のドイツ占領時代、土の中に埋めて隠されていた）、エジプト遠征のクレベール将軍、ロシア遠征のルフェーブル将軍などはナポレオン配下の将軍たちの中でも名高い。